

教員の使命 職責 心構え

－ 教職生活をふりかえって －

秋池 功（埼玉県立学校人事課）

1 はじめに

平成 25 年 11 月 16 日「明治大学教育会」の第 1 分科会で発表する機会をいただいた。関係者の皆様方にいろいろお世話になったことを深く感謝したい。

私は、昭和 47 年 3 月に本校を卒業し、当年の 4 月より埼玉県鴻巣市立馬室中学校（昭和 40 年 3 月で市内の中学校と統合により廃校）社会科教師としてスタートを切った。

平成 21 年 3 月に定年退職となり、当年の 4 月から平成 25 年 3 月まで埼玉県立学校人事課で専門員として学校相談の業務を担当し、教育相談や高等学校の周年行事等の任務を行ってきた。

その間、41 年間、学校、行政等いろいろな面で学ばせてもらったことは、大変、有意義なことであったと生徒をはじめ様々な出会いの方々に感謝している。それとともに、学校、教育センター、教育委員会等を通して、授業、学級経営、学校経営、初任者研修、教員の採用試験、臨時的任用教員への対応や指導助言等に携わってきた。

私が思うに教職に就いていることは、人前で話すことである。教師は、授業を通して話し、指導を行なっていかなければならない。児童生徒にわかるように話していくには、教材研究が不可欠である。また、教師は、言動面、行動面でも指導者としての範を示さなければならない。すなわち授業や人格面の向上を図ることである。まさに教育公務員特例法が述べているように「研究と修養」に努めなければならないのである。自分自身学習面、人格面ともまだまだ未熟であるが、教職に携わったお陰で、学ぶ意欲は、いくらか高まったように思える。

今回は、私が今後も学び続けて行きたいことを目指す意味で、いままでの教職経験の中からほんの一コマを述べることにした。

2 教員採用試験の現状と臨時的任用者の受験について

私たちが教師になった昭和 47 年頃は、児童、生徒も多く、教員の採用も多かったので合格しやすかった。しかし、中学校、高等学校では、教科によって倍率の高いところもあった。ただし、このころは、（昭和 47 年）複数の都道府県を受験することができた。

現在では、かけもちで受験することは、難しくなっている。

(1) 採用受験について

教員採用試験も倍率の高い年もあれば、あまり高くなく比較的合格しやすい年もある。埼玉県の例で受験倍率等を挙げておく。

年度	学校種別	名簿登載者数	倍率
13年度	小学校	230	7.5
	中学校	52	27.9
	高等学校	104	19.8
	養護教員	20	8.5
22年度	小学校	717	3.0
	中学校	343	6.6
	高等学校	276	7.3
	養護教員	48	6.9
26年度	小学校	780	3.6
	中学校	521	5.6
	高等学校	497	5.7
	養護教員	26	11.5
	栄養教員	6	10.3

* 平成26年度は、小学校のみ後期の採用試験を11月に行った。(80名募集)

受験の内容等においては、「埼玉県公立学校教員採用選考試験要項」に具体的にいろいろ述べられている。その中の主な内容だけをまとめておきたい。

試験については、一般選考と特別選考に分けられる。(特別選考は、埼玉県でもいろいろな場面があるので、先に述べた教員採用試験要項を参照して欲しい。)

一般選考は、第一次が専門分野と一般教養・教職科目の筆頭 特別選考は、第一次が専門分野と面接試験 二次は、面接、適性試験 論文試験が行われる。中・高・養護の場合は、教科等によって実技試験も行われる。

(2) 臨時的任用者の受験について

この選考試験について、私が校長時代等に受験者の指導助言に当たったのは、臨時的任用者である。この方たちの試験では、面接と論文が大切である。中でも二次試験での論文がしっかり書けないと合格に至らないことが多いように感じる。やはり、試験は、平等、公正に判断されなければならない。そのためには、ある程度の科学的データを試験の中に残さなければならない。

私が関わった臨時的任用者の先生方は、日々の教育活動を真剣に取り組む人が多かった。このことから、私をはじめ、同僚の先生方も何とか合格してもらいたいといろいろ援助したものである。しかし、中には、日々の教育活動がまず優先となるので、つつい論文を書く訓練ができにくくなって、合格論文に至らないこともあった。また、面接においてもある程度の教職面の知識や一般社会面の知識も求められる。日々の学校勤務と自己の学習時間の確保と大変であるが、やはり、受験勉強は必要である。

臨時的任用者の方で、いまでも印象に残っているD先生がいる。その先生の中学校の受験教科は、毎年、採用人数が少ない。合格には、それなりに真剣に受験勉強を行わなければならない。D先生は、日々の教育活動にも大変熱心であった。大学院を出てすぐある市の中学校の臨時的任用教員になり担任を持っていた。その学校で、3年間勤務し、3年生を卒業させた。私もその市に勤務していたので、D先生の熱心さと生徒からの評判の良さは、把握していた。そのD先生が偶然私と一緒に異動で別の学校で一緒になった。D先生は、自ら担任を希望した。私は、担任を持ちたいなら、採用試験の受験勉強もしっかり行って欲しいことを伝え、1年生の担任になってもらった。彼は、部活動や学級経営等にかなり力を入れて、やはり生徒たちや保護者に大変人気があった。しかし、採用試験は、一次で不合格となってしまった。一生懸命行い、人柄もすばらしい先生である。私としては、何とかまた、同じ学校で臨任をやり、今度は、担任をはずれ勉強させ合格してもらいたいと思い、地元の教育委員にも熱心をお願いした。しかし、次の年は、D先生の教科は、私の学校はじめ、他の市等の学校にも勤務する採用枠がなかった。

私も今までに4年間校長を行った中で、臨任者の勤務が決まらないことは、なかったのだからかなりショックであった。

多くの校長は、臨時的任用者の人事を心配し、何とか次も勤務があるようにと願っている。なぜなら、臨時的任用者は、長くて1年(半年での更新)が、その学校に勤務できる条件になっている。(採用条件によって勤務の長短がある。)

正規教員は、身分が法律によって守られ、特別な違法行為がない限り、かつてにやめさせられることはない。また、人事異動についても毎年、意向調査があり、ある程度、自分の思いを調書に記すことができる。臨時的任用者には、そのような権限がないのである。だからこそ、校長として最大限、次の任用について神経を使うべきと思っている。

D先生の勤務については、地元教育委員会の課長さんや担当の指導主事の先生方が埼玉県内当たってくれたが、それぞれ他の臨任の方もいて、どうしても決まらなかった。

D先生は、他県から来て、下宿していた。就職がないと、4月からは、給料が入らなくなるのである。下宿代と日々の生活費等幾分かのお金では大変なことである。

ある程度人事も内定してしまった3月上旬ごろであったか、私は、彼を焼肉屋に連れて行き、なんとしても生活できる就職先を探そうと話し合うとともに、次は、必ず合格を彼とともに願った。かろうじて地元の教育委員会の担当指導主事さんが、常勤ではないが、特別枠の加配の臨時的任用を私の学校に決めてくれ、D先生もまた勤務することができた。

D先生は、1年間担任をはずれ、勤務のない日は、図書館等にも通い、必死に勉強したのであろう。今度は、合格した。現在は、ある市で持ち前の熱意ある教育活動で、学校の中核教員としてがんばっている。結婚も当時一緒だった方と結婚し、お子さんも持ちながら二人ともがんばっている。

3 教諭時代をふりかえって

(1) 教師は、授業で勝負する

教師の一番の任務といっても過言ではないのは、日々の授業の充実である。

児童生徒にわかる、楽しい授業をどのように展開したらよいかを日々研究、研鑽をしていかなければならない。そして、教師は一日の勤務の中で授業を通して子供たちと接するのが一番長い。だから、授業を通しての学習指導（生徒指導）の充実も努力していかなければ、子供たちにわかる、楽しい授業にはならない。

かつて私が、ある先生の授業を午後の第5時限目に見たときに、多くの生徒が机に打つぶして寝ていた。また、そのような生徒は、教科書を持っていなかったり、持っていたも開いていない。教師の板書などをノートに写すなど程遠い状況であった。

生徒たちが授業者の先生を完全になめきって、授業を受けている状況である。一方、授業者も話す声が小さい、指導に興味関心を示す指導法の努力も教材の工夫もなされていなかった。いい加減な態度で授業を受けていても注意や指導もしない。できないのかもしれない。

授業の充実には、教師の教材研究の深さも大きく影響するが、授業を通して児童生徒をしっかり鍛えていくことも大切である。そのことを踏まえると、指導者としての厳しさも必要である。授業で使う道具も忘れる。授業を受ける態度もいい加減な子供たちをほったらかしにしては、わかる、楽しい授業に程遠いものとなる。

授業をしっかり成り立たせていくのは、新学期の4月の一ヶ月間ぐらいが大切である。この間に自分が教えていく上で必要な学習作法を身に付けさせなければならない。

これは、教師間で共通理解を図って行うものと、その教師独自に行うものがある。私は、次のようなことを重視して授業を行った。

ア 生徒たちへの指導（生徒指導的なこと）

- ・ ノートのとり方と予習のさせ方とその点検
- ・ 教科書を忘れたものは、休み時間中に他クラスで、できる限り友達から借りて受ける。（忘れることが多い生徒は、授業中でも借りに行かせた。ただし、このような場合は、教師間でお互いに共通理解を図っておかないと、他のクラスの教師、児童生徒に迷惑をかけることになる。）

ノート指導や教科書の重要性を4月当初にしっかり指導しておく、その後、子供たちは、いい加減なノートの扱いをしないし、予習も適宜行ってくる。（予習も宿題と違って強制はしない。しかし、授業の展開の前に、机間指導を通しながら評価のできる印を押すので、意欲的に予習を行ってくる子が多くなっていった。）教科書については、授業中借りに行かされるのは嫌なため、忘れる子が少なくなっていく。

イ 授業研究や自主的サークルから学ぶ

授業者の教師が、自分の授業がどんなものなのかを他の教師たちに見てもらい批

判も甘んじて受けていく姿勢が大切である。

私が最初に赴任した学校は、小規模の中学校であった。しかし、授業研究をどの教師も意欲的に行っていた。また、私と同様の教師でお互いに授業を見合うこともした。教科は、社会と英語であったが、それぞれ生徒の指導の仕方、授業における教材の提示、発問等さまざまな面で勉強になったものである。

また、授業や自分が担当する教科について力量を高めていくには、勤務時間外に学ぶ自主的なサークルに参加して、他の地域の学校で教える先生方からも学ぶことも意義あるものとなる。

私も附属中学校内を会場とする社会科の会に教員2年目から入れてもらった。月1回ぐらいであったが、土曜日の午後に鴻巣から浦和まで通ったものである。また、私たちでも昭和58年に「社会科を楽しむ会」をつくって、やはり月1回ぐらい、勉強会を行った。その他、自分なりに道徳の授業にも興味があったので、川口市を会場とする道徳の研究サークルにも数年参加して学んだ。このことが、校長になっても先生方といっしょになって道徳の授業を行えるようになったと思っている。

授業の充実には、教師が学び続けることが不可欠である。

ウ 視覚に訴える資料の提示や教材の開発に努める（社会科の場合）

教師を何年か行っていると、授業のマンネリ化を感じる場合がある。教材研究用のノートもいろいろ工夫をして、一番良かったのは、スケッチブックの大きめのものにした。これだとB4のプリントも貼り付けられたからである。当時は、TPシートも作成してOHPを積極的に活用して、生徒の興味関心を高める努力をした。しかし、私自身がやる気と楽しさをもって授業に取り組めたのは、教材の開発である。

例えば、地域教材の開発や人物学習の教材開発である。現地に直接行って、現地の方から聞き取り調査、見学をしたり、図書館に行って、文献等を調べたりして授業用の教材が完成したときは、授業にも意欲がわいてくる。このような教材の開発は、1年間に数回か1、2回ぐらいしかできないが、積み重ねる中で量も多くなる。また、自分自身の旅行的取材となり、楽しくかつ知識面も豊富になってくるので有意義なものである。このことによって授業のマンネリ化も防げる。

授業において参考となる内容を挙げておきたい。

・よい授業の条件（教師の研修ノート <遠藤五郎著>一第一法規）

- 1 授業のねらいが的確に捉えられているか。
- 2 教材が精選されているか。
- 3 指導の立場が明確で、学ばせたり、考えさせたりする時間と説明したり、教えたりする時間との区別がついていること。
- 4 指導案とのずれに対処できること。
- 5 学習の流れに変化をもっていること。
- 6 子供の経験に即し、子供の意見がより合わされていること。

- 7 個別指導について配慮されていること。
- 8 学習内容の定着について工夫されていること。
- 9 学習が連続，発展するような指導であること。
- 10 評価の手立てが用意されていること。
- 11 学習中において望ましい雰囲気が高められていること。
- 12 学習環境が健康であること。



4 教師は，子供たちと触れ合う中で喜び，苦勞，感動を味わう。

(1) 学級担任として

教員になって授業とともに学級担任を持つことは，やる気と喜びと苦勞が伴うものである。中でも学級担任は，自分なりに学級の経営を行い，児童生徒と1年間の教育計画を描き，活動していくので何かと気苦勞も多いものである。教師の中には，学級経営がうまくいかず，精神的な病気になってしまう方や学級崩壊を起こし，担任がもてない方もいる。その面から考えると，学級経営は，やる気と苦勞の連続である。

「経営」について広辞苑で調べてみると，いろいろな解釈が載っている中で，「奔走する。」があった。すなわち，「あれやこれやと忙しく動きまわる。」ことである。

担任として，教室の環境，子供のこと，事務的処理，テストの採点，学校行事，学年行事のかかわり，保護者への対応等，数え上げたらきりが無いほどの業務が担任に課せられている。このことからまさに，学級経営は，「奔走」することなのかもしれない。

これは，学級経営だけではない。企業の経営，学校経営や私たちの家庭を含めて「経営」とは「奔走」していかなければならないものであろう。学級担任は，忙しいが，担任外より子供たちの触れ合いがあり，楽しみでもあるし，卒業後，同窓会での集まりでも卒業生は，まず，自分たちの担任を意識するものである。

平成25年12月に40代半ばを過ぎた中学校の卒業生の同窓会が行われた。当時，私

は、学年主任として3年生を送り出した。中学卒業後、学年主任と担任が一同に招待された同窓会は、その年代の卒業生で初めてであった。また、私自身、いくつかの卒業生の同窓会に出ていたが、学年主任として出席するのも初めてであった。

出席してみて、卒業生たちは、まずは、担任の先生方と懐かしく話していた。私が卒業生から結婚式に呼ばれてきたのも担任をした生徒や部活動で接してきた生徒であった。担任とは、それほどまでに子供たちの心に残るものなのである。だからこそ、日々の学級経営の充実が図られなければならない。

私が学級担任を行ったときに自分を振り返るために次のような評価項目を作った。

学級経営の評価（日々の点検）

* 順不同

- 1 朝の会で出欠の確認ができているか。（出席簿の用意）
- 2 連絡忘れ等のミスはないか。
- 3 いつも怒っているような注意が多い話になっていないか。
（時には、ユーモアや笑顔があり、生徒に穏やかに接しているか。）
- 4 生徒に1日どのくらい語りかけているか。
- 5 いろいろな書類が整理されているか。
- 6 問題等配慮すべき生徒をよく把握しているか。
- 7 週番（日直）班長、学級委員にどれだけきちんと指導しているか。
- 8 清掃を生徒がよく行っているか。教室の美化はどうか。
- 9 担任としてできるだけ教室に行っているか。
- 10 帰りの会の時に行う、生徒のスピーチ（順番で1分間の話）がきちんとできているか。
- 11 担任の心の余裕があって生徒の行動をよく把握しているか。
- 12 学校行事の指導はどうか。（賞状がとれる指導と熱意があるか。）
- 13 清掃等生徒と一緒に行動しているか。
- 14 叱る前に生徒の主張や行った理由を聞いているか。

(2) 教師と子供たちと行動を通しての触れ合い

学校教育には、子供と交流する触れ合いは、様々なものがある。そのような中で、私が印象深く残っているのは、部活動や学校行事、総合的な学習の時間や放課後を活用しての農園での野菜栽培等が、生徒との触れ合いを高めたように思っている。

ア 部活動について

部活動の存在は、中学校の場合子供たちや保護者にとって大きな関わりとなっ

いる。早朝の練習と放課後、土曜日、日曜日等休日の練習を日々行っているのである。私も新任時代から40歳まで軟式テニスの顧問として、毎日のように子供たちとラケットをもって部活動を楽しんだものである。練習試合や大会などにも県内いろいろなところに出かけた。

教員になって2~3年ぐらいは、県大会に出場できればよいぐらいであったが、だんだん欲が出て、将来、県大会すなわち県でトップの優勝を目指そうという目標をおいて、練習に打ち込んだものである。幸い、選手と保護者等に恵まれ、女子の団体に春の県大会で優勝、その年の夏の県大会で二位になった。もちろん個人戦でも優勝は、できなかったが2位、3位の成績を収めた。この年は、男子もがんばり、県でかなりよいところまでいった。また、異動で学校が替わり、男子顧問のときは、個人戦で県二位になり、山梨まで関東大会に行ったことも印象深い。(団体に優勝した年は、関東大会が埼玉県だったので、県外に宿泊で行くことはなかった。)

部活動において、私が心がけたのは、次のようなことである。

- ・朝の練習時間あまり早く学校に登校させない。

子供たちの中には、指導をしていかないと6:30頃に学校に来てしまう子もいる。夏なら明るい、冬場は、まだ、薄暗い状態である。朝、早すぎると学校に教師がいなかったり、家庭でも食事等で大変である。登校時間と練習時間は、厳守することに心がけた。

- ・土曜日、日曜日等休日の練習は、必ずどちらかを休みにする。

休日の練習をすべて使うことは、教師も子供たちも家でゆっくり自由な時間を過ごすことができない。*私自身、若いころは、家庭等を顧みずに部活動に打ち込みすぎたように思っている。

・練習試合や大会の時には、日時、場所、終了時刻等をしっかり家庭に伝えるようにした。*最近の教師の中には、〇〇部だよりを定期的に発行して、保護者がよくわかるようにしている。

部活動を指導していく中で、気をつけなければならないのは、部活動が教師の一番の使命のような先生もいる。また、〇〇専門委員長になって、空き時間や放課後等に電話を占有して、他の先生方や学校に支障をきたすような教師もいることである。また、部活動はやるが、授業はいい加減、自分の担当の校務分掌は、無責任な態度でいる教師もいる。

部活動の指導が、授業や他の業務に生きてこそ、教師の指導の充実となっていくことを忘れてはならない。

イ 学校行事について

学校行事には、いろいろな活動がある。中でも体育祭、文化祭や修学旅行、林間学校(スキー林間のところもある。)準備等にも時間がかかり、また、教師と児童生徒が一体となって楽しさをつくっていく。学校によっては、校内の合唱コンクールに相当教

師，子供たちが力を入れ，どこのクラスも熱心に取り組んでいるところもある。

私自身も3年生の担任をしていた時に「大地讃頌」を生徒たちが何回も何回も練習し，優勝した時の歌声と感動を忘れることができない。今でも本番の時のテープは保存したまーに，聞くこともある。



ウ 学校農園の活動

埼玉県教育委員会，はじめ地元の教育委員会でも各小中学校に，体験学習活動を推進している。このことから私も，校長時代自ら学校教育の中で，草花や野菜を育て，自然に親しむことと，自然に関わりながら労働をして汗を流す体験活動を重視し，自分自身生徒とともに鋤や耕運機なども扱って，農園栽培の活発化に努めた。農作業をしながら生徒との会話も生まれ，校長なりに生徒を知ることもできた。3校の学校を校長として経験したが，すべて学校の近くの農家で土地を借りて，農園活動を行った。生徒が，家庭にトマト，ナス，キュウリ，さつまいも，ダイコンなどを持ち帰り，保護者も喜びも把握できた。

しかし，教師にとっては，夏場の草とり，分担での水くれの指導などいろいろ手間がかかり，教師自らが農園活動に力を入れる人は，少ないように感じる。



5 学校の危機管理について

学校は、いつ、何が起こるか分からない平成 21 年 3 月に定年を迎え、37 年間の教職生活に一応の区切りをつけることができた。

教職生活を振り返れば山あり、谷ありで苦楽の出来事が走馬燈のように思い浮かんでくる。中でも校長 10 年間の管理職時代は、責任感もありそれなりに緊張した時であった。そして、いろいろな出来事にも遭遇した。しかし、遭遇したアクシデント等には、真剣に取り組むとともに教育委員をはじめ、教頭、教職員、保護者等の方々が一丸となって教育活動に向かい合ってくれたことが何とか困難に遭遇した時でも乗り切ってこられたのかなと思っている。また、先輩の先生方、仲間の校長会も大きな励みとなった。改めて多くの支えに感謝している今日である。

学校経営の中で日頃重視していったことは、学校の危機管理である。学校における事件、事故等をいかに防ぐか、また、起こってしまったらいかに迅速に必要な対応策をとって日々の教育活動を正常に機能させていくかである。

私自身が校長として経験した危機管理に関係した様々な事件、事故を振り返り、他の校長先生や教職員の方々が今後の学校運営や教育活動に少しでも役立つよう、体験をとしてまとめてみた。

まずは、危機管理の基本を押さえておきたい。「学校の危機管理」永岡順編著（東洋館出版）によると、「危機管理とは、事件・事故の発生に伴って生まれるダメージを軽減し、組織の維持を図るための経営手法である。それは、予防的対応と実際の事件・事故発生への対応とに大きく分けることができる。」そして、学校の危機管理のねらいは、「まずは、子どもの生命を守ることであり、子どもと教師との信頼関係をつなぎとめ、維持していくことである。— 学校の危機管理は、信頼関係の維持の基本が押さえられていなければならない。」そして、「組織の動揺を防ぐことを通して子どもと教師の信頼関係や、学校に対する社会的な信用や信頼を守ることにある。」— 。

このような危機管理の基本を踏まえると、日頃の学校での教育活動が、大きな事故、事件等がなく営まれていくことが子供たちの生命を守り、教職員のやる気を高め、保護者、地域社会からの信頼にも繋がっていくものとなる。しかし、危機の回避を図っていくために常々気をつけているが学校は、いつ、何が起こるか分からず私自身も10年間の校長職を行っている中でいろいろなことに遭遇した。

その主なものを挙げると――

- 1 外部者によるガラス等の破損
- 2 夜間における外部者の職員室を含めた校舎内の侵入
- 3 生徒の怪我
- 4 生徒同士のトラブルによるアクシデント
- 5 給食室で危なかった事故
- 6 修学旅行中の危機一発で危険を免れたアクシデント
- 7 生徒による施設へのいたずらや破損
- 8 職員の突然の死
- 9 生徒の家出
- 10 その他

このような、さまざまな事件の中でも校長、教職員は、常に前向きに立ち向かっていかなければならない。まずは、迅速な対応が不可欠である。事実確認を複数で明確に行い、報告、連絡、相談も忘れてはならない。そして、外部との対応は、窓口を一本化しておく。また、管理職は、必ず現場に行くことである。また、事件、事故が起こったときは、地元教育委員会、保護者、地域の方の協力は不可欠である。

私が校長の時は、3校とも学校の近くの家に挨拶に行き、学校が何かあったときには、至急連絡して欲しいことをお願いした。また、PTA会長さんには、教職員と同じように、嫌なことを含めてできる限りのことを連絡した。地域、PTAの協力によって安全管理ができたことも大きいものである。

危機管理は、平成23年3月11日に発生した東北の大震災を踏まえ、自然災害への対応やかつて大阪で起こった池田小学校の外部者への対応、いじめ等の生徒指導は、今後とも人命を守る上でも日々の点検、訓練等が必要である。また、文明が進む中、パソコン、携帯電話等、通信関係の危機管理も必要になってくる。日常はもとより、教職員一体となって行う定期的な安全点日の点検結果をどう生かしていくかも大切なことである。

6 おわりに

学校は、組織体である。個人プレーでは、学校の教育目標等達成できない。組織の一員として教職員の報告、連絡、相談、協力が不可欠である。

教師となって、定年まで目指していくとなると、長い歳月がかかる。この教職生活の

歳月をやる気をもって過ごしていくには、まずは、子供たちからのエネルギーをもらうことである。子供たちを念頭に置きながら、授業や学級経営，学年経営，学校経営を悪戦苦闘したり，喜び，楽しみを体験したりしながら過ごしていくと，定年までの長い歲月もあっというまに過ぎ去ってしまうものである。ただし，長い教職生活の中には，苦難な時もある。この苦難な時をどのように乗り越えていくかも大切なことである。そのためにも組織の一員として教職員の交流を高めるとともに，研究，修養の充実を目指していく必要がある。

苦難な時を乗り越えるしたたかな精神力は，児童生徒，教職員等の人々との関わりの中でやり甲斐，生き甲斐を見出すことではないかと考えている。私の経験から，やり甲斐，生き甲斐は，教職の仕事の中で，自分なりに好きなものを見つけ，伸ばしていくことが大切だと思っている。